



「じゅんちゃんが大人になって車を運転出来るようになったら
横に乗せてね。」

死んだ僕のあばあちゃんはいつも言っていた
おばあちゃんが死んでから十年がたち僕は二十歳になり
タクシー会社に就職し、タクシー運転手をやっている
なぜタクシー運転手になったのかには理由がある
それはおばあちゃんが冷たくなる前の話

僕はおばあちゃんの男の初孫だった
故におばあちゃんは僕をかわいがった
これは後々おじいちゃんに聞いた話だが
おばあちゃんは何かあると
「じゅんちゃんに教えてあげよう。」
と言っていたそう
僕が小学校に上がるときは大きな勉強机を買ってくれた
今となっては勉強机は当然のものが小学生の頃は高価ものであった
そして僕が学校のテストでいい点を取るたびにになにかを買ってくれた
物でつられていたと言ってしまうとそれだけだが
それは僕にとってもおばあちゃんにとってもうれしいことであった
おばあちゃんのしわの寄っている手で頭をなでられるのが
何よりもうれしかった
小四ときに僕は塾に入った
家から二時間かかる遠い塾だった
おばあちゃんは毎回毎回僕についてきた
そして塾が終わると
「なにか食べようか？」
と聞いてくる
もちろん僕は首を縦に振る
そして毎回塾の後はおばあちゃんと食事をとった
さらに塾のテストで良い点数をとったときにも
おばあちゃんは何か物を買ってくれた
これも物でつられたと言ってしまうとおしまいが
それが支えとなってつらくて遠い塾に二年間通うことができたのだ

僕が中二の時おばあちゃんは入院し寝たきりになった
それでもおばあちゃんは
「学校はどう？サッカーがんばってる？
おばあちゃんもうすぐ元気になるから。」
と僕の心配をしてくれた
しかしそれから一週間後におばあちゃんは目を開けなくなった

僕はおばあちゃんが逝くその場に居合わせた
そして遺言も聞いた
「おじいちゃん今まで有り難う御座いました。あっちでまってるよ。
じゅんちゃんが高校や大学に行ったときに、お金に困らないように
貯金しておいたから、それをじゅんちゃんに使わせてあげて。」
おじいちゃんはただただうなずくだけであった
「じゅんちゃん。」
おばあちゃんは僕の手を握って言った
「じゅんちゃんの運転する車の隣に座りたかったけど、出来そうにもないね」
僕は言葉を出せる状況でもなかった
そしてあばあちゃんの手はだんだん冷たくなっていった

その後、高校、大学と進み就職先を考える時期になった
そして僕は考えたかならず車を運転するような職に就こうと
そしてタクシー会社に就職し今に至るわけだ

そんなある日僕の車に思いもよらぬ客がきた
それは小雨のするじめじめとした五月の夜
僕が並木道を走らせている時だった
道路に人が立っていてこっちに向かって合図してきた
僕はその人の前に車を止めた
そして客が乗り込んできたどうも老婆のような感じだった
「どこまでですか？」
応答がなかった
「お客さん？」
僕はバックミラーをのぞいたするとそこには見慣れた顔が写っていた
黒色のハイヒールにシルクのロングスカートに手編みのセーター
こめかみを青く塗る独特の化粧
まさにおばあちゃんだった
「おばあちゃん？」
老婆は黙ってうなずいたそして言った
「助手席に座らせてじゅんちゃん。」
その瞬間僕の目は涙であふれた
おばあちゃんは慣れない手つきでドアを開け外に出て
助手席に座った
「・・・どこまでですか？」
僕は尋ねた
「・・・何処へでもいいよ、じゅんちゃん。」
僕はともかく車を走らせた

僕の隣にはおばあちゃんがいた
しかし温もりは感じられなかった、やはり死人だからだろうか
そう思っていたときおばあちゃんは言った
「私はもう死んだよでもどうしてもじゅんちゃんの運転している車の助手席に
座りたかったからおねがいたんだよ」
おばあちゃんは後ろに置いてある本に手を伸ばした
「そしたらね一時間だけ許してくれたんだよ
でも何もさわれないんだよ、なにも感じ取れないんだよ」
その時僕は目を疑った
おばあちゃんの手が本を通り抜けたのだ
「出来ることならじゅんちゃんに触れたい感じたいよ
でもこうして出会えるだけで精一杯で。」
僕はともかく車を走らせた

何分くらいたっただろうか
もう涙で前がみえなくなっていた頃
その時は来た
「あら、お呼びがかかったよ、そろそろかえらなくちゃね。」
僕は車を止めおばあちゃんと外に出た
「それじゃあね上でまってるよ、でもすぐに来るんじゃないよ。」
僕は言葉を話せる状態では無かった
「これからも見守っていてよ」
僕は言った
「約束するよ、ずっとじゅんちゃんの隣の席にいるよ。」
「わかった。」
おばあちゃんが光に包まれ
やがてその光はすこしづつ弱くなっていきやがて消えた
そこにはおばあちゃんはいなかった
「あばあちゃん・・・。」

それから僕は客を助手席に乗せなかった
なぜなら助手席にはおばあちゃんが乗っているからだ